

ほうこん

題字・清水英夫

GALAC・11月号・付録
2020年11月6日発行(毎月1回6日発行)
昭和43年3月8日第三種郵便物許可

〒160-0022

東京都新宿区新宿5-10-14 中村ビル2F

NPO法人放送批評懇談会

TEL (03) 5379-5521 / FAX (03) 5379-5510

ホームページ <https://houkon.jp/>

Eメール kondankai@houkon.jp

編集・川喜田尚

第58回ギャラクシー賞 上期応募受付中

―9月理事会報告―

2020年9月24日、9月理事会をZoomにて開催した。

1. 委員会活動報告

◇出版編集委員会 鈴木委員長

・8月20日にZoomにて委員会を開催。「GALAC」11月号の進捗を共有し12月号の特集案を検討した。

・12月号特集は「リアリティショーとは何か」(仮題)。リアリティショーについて、海外の最新事情と国内の歴史考察によって明らかにしていく。また、連載「テレビ砂漠の歩き方」が本号にて終了する。表紙は小栗旬さん、ザ・パソンは小池修一郎さん。

・2021年1月号は第58回ギャラクシー賞上期選考結果掲載号だが、新型コロナウイルス禍による応募数減少が考えられるため、ページが余

った場合は緊急ミニ特集あるいはGALAXY CREATORSを数本まとめて掲載するプランを考えている。同年1月号から新連載として渡邊悟・本誌副編集長による「番組制作基礎講座」(仮題)をスタート予定。

・9月18日より11月号(横浜流星表紙)の予約販売をスタート。

◇選奨事業委員会

・新型コロナウイルスの影響で懸念された応募数の減少は、テレビ部門1次締切時点では多少の減少はあるものの顕著な影響は見られなかった。

・テレビ部門とCM部門の応募要項「提出素材」を一部変更した。

〈テレビ部門〉古川委員長

・石田研一さんを新たにテレビ部門選奨委員として承認した。

・7月28日に月評会をリアルで開催した。

催した。月間賞にはタモリ倶楽部

「ストリートビューでオンライン

撮り鉄! 偶然鉄道フォトコンテ

スト」(テレビ朝日)、BS1スペ

シャル「レバノンからのSOS」

コロナ禍追いつめられるシリア難

民」(NHK)、ドラマ&ドキュ

メント「不要不急の銀河」(NH

K)、個人・フワちゃんを選んだ。

・8月28日にZoomにて月評会

を開催した。月間賞には、「有吉

の世界同時中継〜今そっちでど

うなってますか?」(テレビ東

京)、報道特集 戦争と感染症②

「戦争が広げた2つの熱病」(TB

S)、国際共同制作 特集ドラマ

「太陽の子」(NHK)、NHKスペ

シャル「忘れられた戦後補償」(N

HK)の4本を選んだ。

〈ラジオ部門〉五井委員長

・8月17日にZoomにて定例会

を開催した。「昭和」をキーワ

ードにした「勝手にタイムスリップ

ラジオ 昭和小僧」(山形放送)、

「文化の泉 ラジオで語る昭和の

話」(TBSラジオ)、「ご昭和くだ

さい」(山口放送)を聴取し議論を

・9月14日にリアルにて定例会を開催した。在京AM4社の終戦特番をテーマに、「高橋源一郎と読む 戦争の向こう側」(NHK)、「戦後75年私の8月15日」俳優高倉健の想いがつないだ人々の証言」(ニッポン放送)、「戦後75年スペシャル 封印された真実」軍属ラジオ」(文化放送)、「戦後75年特別番組 ラジオドラマ 青空」(TBSラジオ)を聴取し議論を交わした。

・本年度の「聴く会」は諸般の事情を鑑み、開催を断念した。

〈CM部門〉服部委員長

・8月19日にリアルにて定例会を開催し、28作品のCMを視聴した。大塚製菓カロリーメイト、ポカリスエット、オロナミンCのCM、Smart HR、ユニクロエアリズムなどのCMが注目を浴びた。

〈報道活動部門〉長井副委員長

・市川哲夫さんを新たに報道活動部門選奨委員として承認した。

・8月31日にZoomにて顔合わせ会を開催した。情報交換や過去の出品歴・受賞歴などを共有した。

◇企画事業委員会 丹羽委員長

・8月27日、9月15日にZoomに

て委員会を開催した。

・今年度はウィズ・コロナ、アフター・コロナをテーマに、ウェビナー形式での開催を検討している。今秋は文化・ジャーナリズム系をテーマに、参加料無料、会員らを対象としたテスト版のウェビナーを、来春にメディア・ビジネス系をテーマに広く告知するウェビナーを開催予定。

◇広報委員会 滝野委員長

・9月3日にZoomにて委員会を開催した。

・8月5日にHPオリジナル記事「座談会」2020年春ドラマを語る!」をアップした。

・ギャラクシー賞贈賞式では、予想より取材・報道が多く集まったが混乱はなく、対応も概ね良かった。受賞者インタビューも、9月中旬にYouTubeにアップ予定。

・8月5日に贈賞式模様をYouTubeに公開。アクセス数は2261回(9月17日現在)。

・新規Gメンバーが急増し、現在のメンバー数は333名。

・9月18日、「太陽の子」が月間賞に選出されたタイミングで、「GALAC」2014年4月号(三浦春

馬表紙)の書影、誌面をフェイスブックに追悼として公開。リーチ数4000超と多くの反響を得た。

2. 第57回ギャラクシー賞贈賞式開催報告

・8月3日セルリアンタワー東急ホテルにて、贈賞式を開催。贈賞式後に予定していた茶話会は、開催直前の感染者数増加を鑑み、中止とした。

・新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底した会場設営を行った。

・参加人数は選奨委員と関係者で61名、受賞者とゲストで58名の計119名だった。

・9月4日の「GALAC」10月号に贈賞式レポートを掲載した。

・開催2週間を経過した時点で、出席者の感染情報はなかった。

◇贈賞式決算を報告。

◇第58回ギャラクシー賞贈賞式は2021年6月2日を予定。

3. その他

①入退会の件

〈入会〉桜井達也さん

〈退会〉柴田篤さん

今後の理事会

10月29日(木)、11月26日(木)

【出席】音好宏、川喜田尚、藤田真文、出田幸彦、丹羽美之、鈴木健司、古川柳子、五井千鶴子、服部千恵子、滝野俊一、市村元、奥律哉、国枝智樹、汲田亜紀子、上滝徹也、小林毅、桜井聖子、鈴木嘉一、長井展光、桧山珠美、水島宏明、山田健太、中島好登

会議記録

17日	(選奨) ラジオ定例部会
19日	(選奨) CM定例部会
20日	出版編集委員会
27日	企画事業委員会
28日	(選奨) テレビ月評会
[9月]	
14日	(選奨) ラジオ定例部会
15日	企画事業委員会
23日	(選奨) CM定例部会
24日	理事会
28日	出版編集委員会
30日	(選奨) テレビ月評会

◆8月の理事会は休会しました。

◆7月理事会報告

2020年7月29日、7月理事会をZoomにて開催した。

1. 委員会活動報告

◇出版編集委員会／鈴木委員長

・新委員会メンバーによる委員会を6月29日、2回目の委員会を7月21日に開催した(いずれもZoom)。

・10月号特集は「ポストコロナ(ウィズコロナ)の放送」。コロナとの共存時代に向けた新しい放送のヒントとなるような寄稿、および現場レポートで構成予定。さらに8月3日開催ギャラクシー賞贈賞式の現場レポートを6Pで掲載予定。表紙は伊藤沙莉さん。

・11月号特集は「科学の伝え方」。

放送メディアが科学的指向や専門性データを番組づくりにどのように生かしているのか(あるいは生かしていないのか)ということを多角的に検証する。

・当面の基本方針として、放送界におけるアップトゥデートな話題を積極的に取り上げていく一方で、新型コロナ禍の収束が見えないなか、その動向を見据えた企画を優先していく旨、委員間で確認。

・2021年1月号から新連載を2〜3本開始する予定。

◇選奨事業委員会

〈テレビ部門〉 出田前委員長、古川委員長

・6月29日に2019年度選奨委員による最後の委員会を、4カ月ぶりにリアルで開催。月間賞には「世界は3で出来ている」(フジテレビ)、ドラマスペシャル「スイッチ」(テレビ朝日)、魔改造の夜「トースター高跳び」(ワンちゃん25m走)(NHK)、E TV特集「すべての子どもに学ぶ場を―ある中学校と外国人生徒の歳月―」(NHK)の4本を選んだ。

〈ラジオ部門〉 五井委員長

・6月23日にZoomにて定例会を開催。「在宅はラジオでJAZZ」をテーマに、「オトナのJazz Time」(ラジオ日本)、「インビテーション」(ラジオジャズ)(静岡放送)、「渡辺美香のwonderful world」(CBCラジオ)を聴取し議論を交わした。

・7月14日に、新体制による定例会をリアルで開催。プロ野球が無観客で開催したことを受け、元プロ野球

選手がパーソナリティをつとめる番組、「岩本勉のまいどスポーツ」(文化放送)、「上泉雄一のええなあ」(毎日放送)を聴取し議論を交わした。

〈CM部門〉服部委員長

・7月20日に定例会を開催。新任委員のリアルでの初顔合わせを予定したが、東京都の感染者数が急増したためZoomに切り替えて行った。

・34本のCMを視聴した。RIZAPシリーズ、任天堂 リングフィット アドベンチャー、サイボウズ「がんばるな、ニッポン。」、サントリー クラフト・ボス「宇宙人ジョーンズ・顔合わせ篇」などが注目を浴びた。

〈報道活動部門〉茅原委員長

・報告は特になし。

◇企画事業委員会 丹羽委員長

・報告は特になし。

◇広報委員会 滝野委員長

・7月6日に新体制の委員会をZoomにて開催した。

・6月28日にYouTube公式チャンネルに動画「予告!第57回ギャラクシー賞の発表は…」アップした。
・7月2日にYouTube公式チャンネルに動画「発表!第57回ギャラクシー賞」アップ。チャンネル登

録者数242人、再生回数10,394回(7月22日・10時現在)。発表数日前からツイッターで予告&当日実況を行った。HPのアクセス数も、通常1500~1800のところ、同日は5000前後に増加した。

・8月3日の贈賞式対応(受賞者インタビューや取材対応など)を検討した。

・Gメンバー勧誘のため、新規登録者にGALAC最新号贈呈を恒常特典として追加することとした。

・Gメンバー新規登録が急増した(7月15日から60名以上が入会)。

2. ギャラクシー賞贈賞式の件

第57回ギャラクシー賞贈賞式開催内容を検討、確認した。

3. その他

①入退会の件

〈入会〉石田研一さん、市川哲夫さん

〈退会〉嶋田親一さん

【出席】音好宏、川喜田尚、藤田真文、出田幸彦、丹羽美之、鈴木健司、古川柳子、五井千鶴子、服部千恵子、茅原良平、滝野俊一、市村元、入江たのし、奥律哉、国枝智樹、汲田亜

紀子、上滝徹也、小林毅、桜井聖子、鈴木嘉一、長井展光、松山珠美、水島宏明、山田健太、中島好登

会議記録

「7月」

(選奨) ラジオ定例会

(選奨) CM定例会

出版編集委員会

(選奨) テレビ月評会

理事会

14日
20日
21日
28日
29日





放懇 YouTube チャンネル

放蕩インスタグラム

デイリースポーツ 8月3日

2019年度のギャラクシー賞（放送批評懇談会主催）が発表された。テレビ部門大賞は、経済的利益に直結しない基礎研究を軽視する国の政策に警鐘を鳴らした、テレビ信州の「カネのない宇宙人」が選ばれた。報道活動部門ではケーブルテレビの中海テレビ放送（米子市）が「中海再生への歩み」で受賞するなど各部門とも、多岐な視点で現在を捉えている。

★ ★ ★
「カネのない宇宙人」は長野県の国立天文台野辺山宇宙電波観測所に1年間密着、国による基礎研究の予算削減で、運営費が削がれ、研究員が暮らす生活が逼迫する情勢に問題意識を投げた。と見られる天文学者に寄る。関係性を築くことで、長期取材の一方で定期的にローカル番組で現状を伝えたことで、立松健一所長に信用され、人間に迫ると振り返る。「時間があるのは地方の利。中央が求める制度を、離れて見られるのも大きい」と説明する。

テレビ部門の出陣委員長は



テレビ信州の「カネのない宇宙人」より、「科学者である前に人間である」の言葉を胸に、軍事研究への取材姿勢を示した野辺山観測所の立松健一所長



川崎浩二（左）と田中裕二（右）は、ギャラクシー賞の審査員を務めた。田中裕二は「カネのない宇宙人」の制作陣に所属する。

環境保全 長年追い続ける

ギャラクシー賞報道活動部門大賞

中海テレビ「中海再生への歩み」



ギャラクシー賞で大賞を受賞した「中海再生への歩み」の一端（中略）に放送当時の個人史を聞く価値を伝えた。高知尾崎プロデューサーが、神龍の「龍巻の」特番として提案した。「お二人の素晴らしい話を伝えるには、シンプルさが生かされるのでは。観客から子へ語る、という普遍性もあって人の心に訴えるのかもしれない」とみる。

C M部門大賞はカネボウ化粧品シリーズ「I HOPE」で、島根県海士町在住のラジオリポーターが、機嫌をよめはじめ多岐にわたるキャスティングが実現し、「笑でなく希望を語るブランドへ」のメッセージを示す。

同部門の服飾子委員は、井手上さんが「特別ですら自分決めていけばいい」と語るシーンにすこし感動と話し、「個性をどう磨かせるかが化製品の役割だし、枠を超えた新しい企業になろうという姿勢は素晴らしい」と評価した。

20年度は新型コロナウイルス禍のコンテクストを審査することになる。感度対策は制作の失脚になるが、服飾委員長は「さまざまな制約の中で、人の心を捉えるのがCMの役割です」と話す。出陣委員長も期待する。「今まで通りでいいことで賞が下がるのではなく、テレビに新しい挑戦が生まれている。制作者は意欲をかき立てられていると感じます」



カネボウ化粧品のシリーズ「I HOPE」のCMメインカット

山陰中央新報 7月29日



めざましテレビ 8月4日

同上

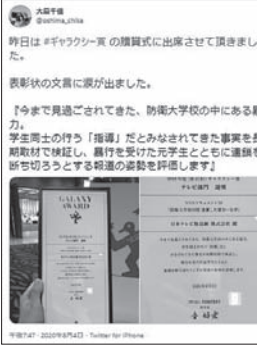
グッとフック! 8月4日

同上

受賞者喜びの声



ジョン・カピラニ



テレビ「防衛大学の関」大島千佳さん



神田伯山ディレクター



テレビ「スカム」小林勇貴さん



マイベスト「きのう何食べた?」阿部真士さん



太田光代さん



CM「見えない障害と生きる。」桑山知之さん

改めてテレビ番組と向き合う機会に

石田研一

祖父がテレビやオーディオなど新しいものが大好きで、もの心ついた昭和30年代初めには自宅にテレビがありました。大学では法律を勉強しましたが、ジャーナリズムを目指したいと思い昭和52年にNHKに記者として入局しました。NHKと関連会社であわせて43年間勤めました。初任地の新潟局の後、政治部に異動。当時は中曽根内閣の時代です。大部分を政治部で過ごし、政治部長や「ニュース7」などを担当するテレビニュース部長を務め、50代初めまでは報道畑一筋でした。

ニュースリポートの他、開票速報、「クローズアップ現代」などにも出演しました。その後、福岡放送局長になってからは、現場より経営に軸足が移り、東京に戻って、経営企画局長、理事、専務理事、さらに報道系の関連会社で社長などを務め今年6月に退任しました。

経営のほうに移った軸足をもう少しもとの放送現場に戻し、退任を機に改めて放送番組に向き合いたいと思っています。

新入正会員自己紹介

デジタルメディアとテレビの新しい融合の可能性を知りたい

泉貴文

LINE株式会社にて広告領域におけるデータ事業戦略を担当しております。日本でも数多くのユーザーに使っていただいているLINEと、旧来から長く人々に根付いているテレビの融合は兼ねてからのチャレンジで、ユーザーや業界にとつてどのような社会意義があるのか模索しているところです。

例えばユーザーがテレビを見て感動した際は友だちや家族にその感動を共有し合ったり、関連する番組や出演者の公式アカウントを友だち追加することもあるかもしれません。

データというサイエンスについては仕事を通して深く知見を溜めていますが、クリエイティブというアートについてはまだまだ勉強不足と考えております。放送批評懇談会の活動を通して、本業であるデジタルメディアとマスメディアでどのような融合が今後できるのか、次世代メディアを作っていく上で新しい知見をクリエイティブなどを通して学んで参りたいと思います。

新入正会員自己紹介

「時間が主役」のメディアで

市川哲夫

会員の皆様、こんにちは。市川哲夫です。

私は、1974年にTBSに入社以来、主としてテレビドラマを作っていました。70年代から2000年代後半まで、数々のテレビ番組の制作に携わり、その後TBS『調査情報』の編集長を8年半余務め「放送批評」にも活動が広がりました。

そして、16年から中央大学総合政策学部特任教授として「放送文化」論を講じてまいりました。今年3月大学退職を機に、本会の橋本隆先輩から入会のお誘いを戴き、かような次第となりました。

来歴でお察しの通り、「テレビドラマ」と「放送ジャーナリズム」が専門です。「放送」にはすべてがあります。森羅万象、扱わないジャンルはありません。「コロナ禍」もドラマ「半沢直樹」も、同じテレビ画面で私たちは見えています。テレビとは「時間」を切り取るメディアである、というのが長い「テレビ人生」を歩んできた私の実感です。

レッツ・デコン！

今宿裕昭

広告会社のストラテジックプランナーとして28年働くと同時に、芸術系大学の非常勤講師として20年間マーケティング戦略を教えてきました。常に広告の最終的な受け手である

「生活者」視点で広告戦略を立案し、広告を作ってきました。他社が制作した広告は以下に述べる「デコン（デコンストラクション・脱構築）」という方法でチェック、学生に指導しています。

第一にその広告のターゲットはどんな人物なのか。属性や心理的な特徴、ブランドに対する接近度などを推測します。

次にその広告が訴求しているメッセージは何か。わかりやすく翻訳できているか。そのメッセージに納得性があるかを確認します。

最後にその広告の役割・目的を想像します。新商品のトライアル促進、ブランドの知名度アップ、サービス内容理解の促進など広告主が期待した役割・目的を果たせそうかどうか。

今回ご縁をいただいた放送批評懇談会でも「デコン」し続けます！

新入正会員自己紹介

伝える側から見る側へ

桶田敦

ニュース通信社から始まり、キー局、ローカル局と38年間歩んできたテレビ報道の現場から一転、去年から大学教育の現場に身を置くようになりました。

メディア教育中心の学科ではないので、テレビなどのメディアを志望する学生はそう多くはないのですが、幸いにも2年目の今年、ゼミに集まってきた学生たちのほとんどが、テレビ局や映像制作会社、広報など、「伝えることを仕事にしたい」と言っ

て集まってきました。こうした学生たちは、去年の後期に、自主ゼミと称して開催していた「番組を視聴する会」に参加してきた学生たちです。若い人たちと番組を見ていると、「そんな見方をしているんだ」と、こちらが学ぶことが多くあります。

そうした活動も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中断を余儀なくされていますが、放送批評懇談会での活動を始めるにあたって、「会」の活動を再開させて若者と共に番組を見ていきたいと思っています。

新入正会員自己紹介

ウィズコロナ時代のテレビとは？

加藤久仁

NHKで編成を通算25年。昭和天皇崩御や阪神・淡路大震災の編成対応のほか主に番組改定を担当しました。「天才テレビくん」「プロジェクトX」や「朝ドラの8時移設」、多くがもう歴史になってしまいましたね。編成は「制作現場に最も近い視聴者」。現場の事情に染まらず、視聴者感覚を忘れないように心がけて番組を見ていました。

テレビは時代と技術の制約のなかで精いっぱい表現するメディアです。今はアフター・コロナ、ウィズ・コロナでテレビ番組がどう変わっていくのか大変興味があります。コロナの制約を一過性のものとして、出演者をただ大きなスマホ画面に変えただけのものと、この機会にネット空間の演出を巧みに取り入れて見せ方を変えてみようという番組に分かれますね。このあたりにも注目していきたいと思います。

一番苦戦しているのが老舗の「笑点」。寄席はやはり客席と一緒に作るもの。「大喜利」はやはり寄席芸だったと再確認できました。